

2004 年 度 事 業 報 告

1. 「インド洋大津波によるスリランカ罹災に係る救済支援活動」に関わる報告

会員の皆様には標記について多大なご理解をいただきました。理事会により決定しました目標、方法、手続きを理解いただきありがとうございました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、ご報告申し上げます。

C.P.I.としましては「C.P.I.の教育里子家庭の被災救済」を第一義として行動しました。理事会としてこのことを『よし』とする見解で統一しました。(2005年5月21日理事会決議：関連記事 P7)

また、1月28日の会員向け文書『インド洋大津波による罹災里子家庭への救済支援活動を開始します』でも記述しましたように、スリランカの津波被災の惨状が世界の人々の目に触れ、スリランカ救済の気運が高まっています。但し大切なことは、日本人の我々が金銭をつぎこんで指導的に行動することではなく、スリランカの民衆が自ら企図し参画する活動に行動をともにする方向に向け得るかかどうかです。鍵は、日本の青年層の連携心にあると考えています。

① インドネシアでは、被災がスマトラ島アチェに集中し、その地には C.P.I.教育里子がいないことに鑑み、会としては募金などを行いませんでした。

② スリランカでは教育里子家庭への津波被災があると思われましたので、調査の上で SNECC とともに対象者・救済方法を決め、募金することと致しました。

スリランカでの調査が終了した直後の1月28日、全会員に対して激励募金活動を開始し、とくに被災里子家庭救済については募金目標を250万円と決め救済目標を次のように致しました。

- ・家屋全壊家庭には：250,000Rs 相当で建築材料・作業員を手配。
- ・家屋半壊家庭には：50,000Rs 相当で修繕材料・作業員を手配。
- ・家財流出家庭には：15,000Rs 相当で家財道具を購入手配。
- ・里子の兄弟姉妹に：5,000Rs 相当で、学用品の援助を行う。
- ・AL 試験準備のノートを流した里子には、受験ノートコピー代 2,500Rs 供与。

③ 上記募金は2004年3月31日までに、スリランカ教育里子家庭救済金およびスリランカ激励プロジェクト寄付金として、合計249件 ¥4,948,000円集まりました。先ず期中に被災里子家庭救済 ¥2,500,000円を C.P.I.スリランカ口座に送り、SNECC 円口座に送る手配を行いました。

(ただし、現地銀行における口座間移動手続きに手間取り、口座間移動が2005年度にまたがり、その間の救済費は SNECC が C.P.I.との協働行動として一時的に立て替えて下さいました。よって C.P.I.決算では2005年度の決済になります)


④ スリランカ激励プロジェクトの趣旨に賛同いただき寄付(16名約¥2,400,000-)を頂いた皆様とは綿密に協議を行い、価値の深い活動を行ないたいと考えています。

学校を対象とした活動が「心の励まし」として役にたっている事実に鑑み(毎日新聞2004年3月27日版参照)、「サッカーボールを送ろう！スリランカに激励パス(朝日新聞2004年3月27日版)」を

端緒とした激励活動を集中的に行う方針です。

この活動は、2005年度から始まる『学校ボランティア』の意欲を高める活動ともなり、彼らを中心とした現地の若い人々と日本の青年層との連携にも繋がっていくでしょう。そのことを契機に、長期間の激励活動を行うことを目指しています。2005年4月1日からインターンとして工藤君が、専心活動に入りました。日本各地に住まわれている会員各位の、心からの応援を期待いたします。

2. 会員動向

- (1) 正会員(教育里親)の増減をプラスに転じる努力を行いつつ、賛助会員の倍増のため、方策を立て実施することとして、過去の退会会員 1290 名のうち 883 名に、里子新聞を送りつつ賛助会員へ戻ることをお願いし、現会員からの紹介を図った。10 名ほどの呼応があり感謝したい。
- 正会員は前期末の 71 名退会に対して、2004 年度新規支援開始の方は 41 名と予想値の 60%に止まったため、2004 年度正会員数 1192 名となり、前年度よりも 25 名減少した。教育里親口数は 1311 口とこちらも 36 口減少した。賛助会員は期首 110 名であったが、期末 127 名となった。
- しかし新規会員は青年層が増えており、入会理由等を聞くと大変に希望をもてることを報告したい。(地域別会員動向につき、資料 1  P 8)

	2003 年度	2004 年度	増減
スリランカ里親数(口数)	993	966	-27
インドネシア里親数(口数)	354	345	-9
正会員数合計 (口数)	1,222 (1,347)	1,192 (1,311)	-30 (-36)
賛助会員	110	127	+17

* 地域別会員数は添付資料 1 を参照

3. スリランカおよびインドネシアの教育里子支援

1) 支援金額

- ① 対 SNECC(スリランカ)は、予算どおり ¥24,000,000-の教育支援を行った。
- ② 対 PPKIJ(インドネシア)は、予算どおり ¥9,162,000-の教育支援を行った。

2) スリランカ現地運用収支

単位：スリランカ・ルピー - Rs

教育里子 1575 名 里親口数 966 名	通常奨学援助	12,509,856
前年度剰余金 0	OL 試験の優秀者に対する AL 進学特別準備費用	309,600
2004 年度 C.P.I. 支援金 Rs.22,082,545	実務学習援助	250,000
解説： 1. ¥100 = 92Rs. で平均レート換算。 2. 3.	図書館に希望図書購入	154,578
	日本語クラス	240,800
	保健・緊急援助一般会計	0
	特別教育プログラム	635,280
	現地本部・地域センター費	6,706,363
	事務局長費	960,000
	その他現地運営費負担	316,068
	合計	22,082,545

3) インドネシア現地運用収支

単位：インドネシア ルピア Rp

教育里子 404 名 (うち大学生 200 名)	中学/高校学費援助	110,160,000
里親口数 345 名	里子会 補習など費用	166,640,000
前年度剰余金	大学生学費援助	200,000,000
2004 年度 C.P.I. 支援金 Rp.732,800,000	PPKIJ 本部・地域活動費	256,000,000

4. 現地事務所の登記およびスタッフ能力強化

- ① C.P.I.スリランカ事務所の登記が8月に完了した(名称:C.P.I. Liaison Office in Sri Lanka)。
- ② 上記に伴い、SNECC からの四半期詳細円建て予算を C.P.I.理事会が承認して C.P.I.現地円口座に送金し、SNECC 円口座への移動指示書を C.P.I.会長および会計委員長の署名で C.P.I.円口座設置銀行に送って移動を果たした後に SNECC から円建て領収書を受領するシステムを確立した。
- ③ C.P.I.インドネシア事務所の登記は、内務省法務局による審査で時間がかかっている。
- ④ 里子新聞作成の過程で、在学および卒業の教育里子へのインタビュー能力、日本への現地活動報告能力などを高めた。

5. 次世代への橋渡し準備

「今後10年間で躍動する C.P.I.に発展させ、次世代に引き継ごう」との目標を掲げ活動を行なった。

- 1) 評議員会からの意見・提案を受け会の組織活動を活発にすることに努めた。

ポイントは次の 5 点。課題は事務局の人手にあることが明らかになり 2005 年度に改善を図る。

- C.P.I.の社会との接点を増やすために知恵を出し、それぞれの立場でできることを行う。
- 里子交流のよさを広めるために地域ごとに施策を行う。
- 地域会世話役と本部との速い情報交換、きめ細かい協議を行う。
- 会員との的確な連絡により、齟齬の生じない運営、連携した活動を行う。
- 会員間の結束を大切に、地域の会合を活発にする。

- 2) 若い人材の育成を開始した。

将来を担い得る職員候補に対する 2005 年 4 月からの長期現地研修を準備し(コミュニティ参画推進部と呼称)、2005 年度からの IT 事業および事務管理部充実のため準備を行った。

彼ら青年職員の活動の成果が出るためには、3年ほどを要するであろう。

それであるが故に、早めに準備を開始したとご理解を戴きたい。

6. 学校間交流、スリランカへの激励活動がマスコミに取り上げられ全国版で報道された

現地との間で培ってきた力を維持強化し、『目に見えない財産』を広範に活かすことを目標に行動した結果、日本国内でふたつの新聞記事が 2005 年 3 月 27 日に掲載された。

朝日新聞京都総局版朝刊と、毎日新聞全国版朝刊である。(別紙)

- ① 2004.2.13、日本で行われた SNECC との合同理事会で「現地協力学校所在地すべてに、卒業里子を主とした『現・教育里子の実情報告を円滑にしつつ、子どもたちを激励するボランティア』を置くことが謳われている。両国間でこれに呼応する活動を育ててきた。
- ② 毎日新聞の「絵画がつなぐ笑顔」の記事は、C.P.I.が 2003 年に開始した学校間交流の活動が、

図らずも津波の被災で沈みがちのスリランカの子どもたちに勇気を与え、笑顔をとりもどしてもらえらることになったとの心温まる嬉しい記事であった。

③ 学校間交流は、2004 年度に庭野平和財団の助成を得て、さらに発展を期している。この事業は、千葉県東金市校長会会長(2005 年度ご就任)鈴木康夫氏(前・千葉地域会世話役代表)に責任者をお引受け戴いて以来、C.P.I.活動の根幹である『Innovate Japanese People』を実現するものとして C.P.I.-SNECC 協働事業として大切な活動に育っている。

④ 『サッカーボールを送ろう！スリランカに激励パス！』の企画は、学校ボランティアの活動を助け、津波被災の現地学校教師および学生を励まし、それらを通じての日本の青年たちとの友好協力を高める機会をつくる！との考えによる。

日本各地の学校および Jリーグ各地サポーターとの連携により、C.P.I.-SNECC 活動に 18 年間協力してきた学校および津波被災学校に Jリーグサポーターたちの魂をこめたサッカーボールを送って激励し、スポーツを通じた継続的な関係を築いていきたいと準備を開始した。

7. 理事会運営上おきた問題

2003年度から、以下の協議原則による情報の確かな共有および速い協議と実施に努めている。

- ①理事会に設けた運営会議に一定の権限を付与し、正確迅速な理事会運営をを期した。
- ②現地活動は、本会と協力団体からそれぞれ複数役員(それぞれ3-4名)を担当とする合同理事会を、スリランカとは1月-2月、インドネシアとは9月に行って、すべてを決定することとしてきた。

しかし、この制度の設置趣旨の徹底がしきれず、以下に述べる問題が発生した。

- a. 運営会議は定款第18条第5号および第43条に根拠をもつ常務理事会のゆるやかなものとして2003年度総会で設置を議決して戴いた。理事会議案の検討会議としては機能しているが、すばやい判断を要するときの議決の有効性に問題の根を残している。しかし、理事会へ向けての手続き議決は、設置の趣旨からみて遵守されるべきである。そうでなければ組織判断ができず混乱をきたし、ひいては会員に迷惑が生じる故。
- b. また、現地団体との複数理事による年度活動協議は、2003年度から実施しているにもかかわらず、緊急時における合同協議機能が、とくに SNECC との間で欠落していることが判明した。
- c. 上記 a~b はスリランカでの未曾有の大津波被災への対処において出た問題点である。2004年1月(2003年度)に行った2004年度のための SNECC との合同協議において、「協働活動としての規定からはずれることを行う場合も、協働活動に大きな影響を与えることであるときは、その内容につき両者が納得していなくてはならない」との合意がされたが、自明のことと考えられたため、敢えて文書化されていなかった。

上記の大津波被災への対処として協力団体 SNECC は、広い救済をと考え、『津波孤児教育基金』の設置をはかった。C.P.I.運営会議は、これに対して、「その内容・期間・方法をよく聴取し、SNECC 側代表者たちが来日して行う2月の合同会議で協議する」との決定を行った。

- d. しかし、SNECC は、日本側募金および孤児教育里親募集とのかたちで日本側窓口の

設置を急ぎ、C.P.I.理事会との正式な協議を経ないまま、一部C.P.I.役員に諮って日本国内で記者会見を行い、上記窓口となる新団体をつくることとなった。

e. この『新しい教育里親』は、0歳児からの津波孤児を対象としている。

C.P.I.-SNECCの主たる活動である教育里親活動が、SNECCとの18年間の協働に基盤をおいていること、教育里子の基準が『家庭経済や社会状況において困窮しながら優秀な学業成績をあげている子どもとして公平な基準に基づいて選考した中等課程以上の在学学生』にあることから鑑みて、C.P.I.-SNECCの協働活動に影響を与えられたと考えられた。

f. かかる重要案件で、C.P.I.-SNECC間の合同協議が機能しなかったことは痛恨の極みであった。また、結果的にC.P.I.本部および一部地域会に混乱を生じた。

g. C.P.I.理事会は、この問題の総括として、海外協力団体との協議システム徹底を図り、更に、理事・地域世話役代表は言うに及ばずすべての会員がC.P.I.の定款に基づいた活動を根本とし、上記国内運営会議と海外協力団体合同理事会協議を尊重していくよう律を正すことを決意している。

会員の皆様にご心配をかけたことを執行部としてお詫び申し上げたい。

なお、本問題の報告書は2005年5月21日理事会で承認され保管された。

8. 広報の充実

①会報(情報機関誌) ②里親・里子新聞 ③個別里子報告 ④ホームページで分担した。

② 資金その他の理由により、活動ごとのリーフレット改定ができなかった。

③ 里親新聞は、対スリランカ No.3 および、対インドネシア No.3 を発行した。

里子新聞は、スリランカから No.3 および No.4、インドネシアから No.2 を発行した。

④ スリランカ個別報告は、8月25日にOL試験結果、12月20日にAL試験結果および年末里子報告を行った。通年よりも試験結果報告が遅れた理由は、OL試験結果の発表がかなり遅れたことおよびAL試験後の進路調査に手間取ったことがあげられる。

⑤ スリランカの教育里子交代をお願いする方には、12月20日に年末里子報告を行うとき予告をし、2005年3月に新里子の紹介を行った。

会員の考慮期間を考えて、予告から新里子紹介までは数ヶ月の間を置いた。

⑥ インドネシア個別報告は11月に里子報告を行った。教育里子交代を9月に遡ってお願いする方には、里子報告と同時に新しい教育里子の紹介を行った。すでに9月からの新学年のための支援金を頂いているからである。

9. 財務改善を進めた

財務の上では、C.P.I.本部経費および現地(とくにインドネシア)協力団体経費を如何に維持強化できるかが課題である。2004年度中に行なったことおよび準備したことを列記する。

① 2004年11月の評議員会において9月末中間決算で期末予想を行い、建議を受けて予算執行の軌道修正を行い、経費の一層のコスト削減等財務支出調整に努めた。

② 2005年のC.P.I.職員強化の準備およびインドネシアPPKIJ財務の健全化を方針として、また、近い将来の活動飛躍を視野に入れ、収益性受託事業を行う準備を整えた。

10.ビジョン 21 に基づくプロジェクト推進

世界銀行の Japan Social Development Fund による無償プロジェクト「Land Conservation Through Trees and Fruit Trees Project」は、高地土地なし農民の生活向上も目標としており、PPKIJスマランが PPKIJ 本部の了解のもとにプロジェクトの中核を担っている。小西会長は 2001 年以來この活動のアドバイザーとして協力を行い、世界銀行から International Facilitator と認定された。

同プロジェクトは、2004 年 12 月 22 日、インドネシアでは初の Community Driven Development Approach(住民の参画、住民自身による管理体制による) 事業として調印が行われ、教育里子卒業者が Field Facilitator(現場における円滑化推進者)として重要な役割を担うこととなった。